
サスケにひょーい!!

サスケン♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サスケにひょーい！！

【Nコード】

N0371R

【作者名】

サスケン♪

【あらすじ】

サスケに憑依！

能力は無敵！チート？何それ美味しいの？な状態。

しかし、何故かハーレムにはならない！

いいもん！俺は一人の女を愛すのさ byサスケ

主人公は完全チート・既に万華鏡を開眼＋移植済・血継限界をパクするという荒業の三つが成り立っています♪

第一話（前書き）

警告

サスケがキャラ崩壊しています。

チートです。マダラでも手が出せません、しかし原作にはあまり関わりません。

原作サスケの場所には別のうちが入る予定です。

それでも構わない！と言う方のみ閲覧してください。

第一話

サスケ0歳の時

「生まれたぞ、ミコト。この子が私たちの二人目の子だ」

「ええ、イタチの様に立派な忍になってくれますでしょう、なんたって私たちの子なんですから」

「ああ、きつと俺たちみたいな立派な忍になってくれるさ。
この子の名前はサスケだ、うちはサスケ。イタチと共に里を護る存在になってくれるはずだ」

「ええ、そうね……。それと、少し疲れたから私は寝るわ。イタチにも伝えてあげてね？
あの子、表情には出していなかったけど、弟が出来るって聞いてずっとソワソワしてたから」

「分かった、イタチには俺が伝えておく。
お前は安心して眠っていてくれ。サスケを運で体力も減っているだろうからな」

”神波 尚”改め、”うちはサスケ”です。

年齢は0歳、転生者でしゅ！能力はめだかボックスの異常と過負荷を能力としてもらい、ついでに”とある魔術の禁書目録”の超能力をレベル5でもらいました♪

これで俺TUEEEEEEEE！！！！したり、女を囲ってハーレムエンドを目指したいと思います♪

サスケ3歳の時

只今、チャクラコントロールの練習中です。

父さんと母さんがいない間を見計らって、家の庭の池の上を歩く。

成功……した！実はかれこれ3時間の間こればかりやっていたのだ！

原作だとナルトが五行解印をされた後に一発で成功させてたけどあり得ねえよ……。

イメージ豊富な元日本人でも3時間ってキツ過ぎだろ！

まあナルトはその前に木登りやってたし……そう考えると流石はサスケのチートボディ。

「サスケ……？」

「兄さん……ってうおー！ごほっごほっ！助けてえ……」

見つかったあー！イタチ兄さんに見つかった！！

まあ兄さんは俺に甘いし、原作だと俺と里とで俺を重要視したほどだからな、

うん、黙ってくれるはずだ、信じよう。

そして、連れられ連れられ父さんの書斎。

あるえー？なんで父さんの書斎？内緒にしてくれるよね、ねえ！

「あのお……何で俺ここに連れてこられたんですかねえ？

出来たら今の内緒にしてもらいたいなあ……って思ってるんですけど……」

「駄目だ、実を言うと父さんにサスケの行動が最近変だと聞いてな、少しお前の様子を見ていたんだよ。

そしてお前の事を観察していたら、いきなり池に沈んでは起き上がりを3時間も繰り返していたからな。

そしたら水面歩行の業を会得していたと来たらそれはもう驚いてな。この喜びを父さんや母さんにも味わってもらいたいと思ってな」

「いらないよ、兄さん！ってかマジで勘弁してください……。父さんにバレたらなんか言われそうで怖いんだけど」

「心配するな、父さんも喜んで術を教えてくれるかもしれないぞ？
態々チャクラコントロールを練習してるってことは使いたい術でもあるんだろ？父さんなら大体の術を知っているし教えてもらえると思うぞ？強くなるに越したことはないからな」

正にギブ&テイク！まあどうせ、うちは虐殺事件で目立たないといけないんだから今から目立っていた方がいいのか……な？

家族会議開始

「で、イタチはお前が水面歩行の業を成功させたと言っているんだがそれは本当なのか？」

「まあ……成功したといっちゃあしましたけど……」

「凄いわサスケ、流石ね。他にも何かできるの？例えば……写輪眼とか？」

「……ナンノコトデスカネー？オレハシャリンガンナンテツカエナ

「イヨー、H A H A H A ! !」

「『……………』」

これが完璧な擬態！

「ていうか、俺が悪いんじゃないよ？あれだよ、”完成”の性質が問題あるんだよ。」

「なんなの？父さんの写輪眼を一回見ただけで使えるようになるって？可笑しいんじゃないの？よくよく考えてみたら水面歩行の業もよく考えたら誰かがやったのを見たら可能なんだろうね。なんか軽く鬱になつて来た……」

「で、何処まで使えるんだ？写輪眼を使えるとして、水面歩行の業だけではないんだろう？」

「正直に話さない。隠していた理由も聞かない。お前は年の割に十分に賢い子だ。」

「里の者の目に着くのが嫌だったんだろ？安心しろ、お前は俺の息子だ、強くて当然だ」

「来ました！」俺の息子”発言！原作サスケが言って欲しくてたまらなかった言葉を聞いたちゃいました！」

「原作では後ろ姿しか見れなかったけど、生で見ると中々に朗らかな顔をしていた。」

「ええつと…、火遁は豪火球の術と豪龍火の術かな……？
他にも水遁にも適性はあったから……、鉄砲玉の術を書物から見た
ぐらいかな？」

写輪眼でも一度見ないと術を盗めないし、写輪眼は人前で使わな
ったからそれくらいだよ」

「そ……そうか、豪火球の術だけでなく豪龍火の術も使えるんだな
……さ、流石は俺の子だ」

顔が引き攣ってるよ、父さん！

何？豪龍火の術ってそんなに高等忍術なの？

原作サスケが麒麟を使うために適当に使ってた術だから簡単だと思
っていたよ……。

「そこまで忍術を使えてるんだから、少し早すぎる気もするが
忍者学校に入学するか？」

お前程なら直ぐに上忍にもいけると思うが……」

「父さん、俺はまだ忍者学校に行く気はないよ。
あそこには適年齢の時に入る。出来たら父さんや兄さんに術を教え
てもらいたいんだけど……」

「ふむ……、それは忍者学校に入学しながらでもいけるのではないか？」

俺としては直ぐに忍者学校に入学して、早く立派な忍になって欲しいのだが」

「あらあら、母さんからは教えて欲しくないの？
母さんだって昔は上忍で結構強かったのよ？」

母さんが冗談交じりに笑いながら俺に驚愕の事実を伝えてくる。
え……？上忍？マジデスか？どんだけ俺ってサラブレッドなんだよ。

「まあ母さんにも当然教えてもらうさ。
けどね、忍者学校に今入ると周りはみんな年上でしょ？
俺は学業だけでなく友情や恋愛も楽しみたいの。別にいいでしょ？」

「三歳児の言う事じゃないと思うがな……」

「兄さんもこんな感じだったと思うんだけどな……」

「まあいい、お前の気持ちは分かった。これからはお前に沢山の術

を教えて行く。

いずれは万華鏡写輪眼も開眼させて、俺を超える忍になってくれ」

万華鏡写輪眼の単語を出したとき、兄さんの表情が一瞬だけ固まったのを俺は見逃さなかった。

もう万華鏡写輪眼の開眼条件に気付いているのかもしれない。兄さんがどういう思いで行動するかも俺は知っている。

「当然！俺は最強の忍になる忍だからね。父さんも母さんも、それから兄さんも全員超えてやるさ」

「それでこそ、俺の息子だ」

「あらまあ、サスケに抜かされないように私も訓練を再開しようかしら？」

「そうか、俺はお前の兄だからな、俺はお前の越えるべき壁となり続けよう」

だからこそ、俺はこう言った。

第二話

サスケ6歳の時

最近、うちは一族の動きが怪しくなってきた。

恐らくクーデターの話が浮上してきているのだろう。

俺は最近とてつもなく悩んでいた。

俺の能力の”大嘘憑き”は、自分が殺した相手しか生き返らすことが出来ない。

まあ自分は誰に殺されても生き返る事が出来るのだが。

あの時の実験は怖かった。結局、自分の心臓をクナイで刺したが、あの時の痛みは恐らく一生忘れる事の出来ないほどだろう。顔面をトマトの様に潰された球磨川はどれだけ痛みに耐性が有るの？と思ったほどだ。

まあ俺が言いたい事は、両親を生きながらえさせるには、俺が両親を殺さなければならないと言う事だ。

両親を殺せと言われても、別に後で生き返らす事の出来るなら、別に罪悪感も感じずに出来るだろう。しかし、両親はクーデターの主犯格。本当にうちはが全滅したことでクーデターを諦めるのか？

答えは寧ろ逆だろう。復讐を近い、片方がもう片方を殺し、万華鏡

を開眼させて里に復讐を始める可能性も無い事はない。そうなった場合、里の人間は大量に死に絶え、兄さんが危惧していた戦争が起る可能性も無くはない。

それでも……育ててくれた両親を守るべきか？

俺は分からない……。原作での兄さんの気持ちがわかった気がする……。

ちなみに、アカデミーの入学式のイベントの時は、父さんが少し屑に見えたのは内緒だ。
兄さんは流石！って感じだったけどね。

サスケ8歳の時

俺の気持ちは決まった。俺はひっそりと火影様の執務室へと忍び込む。

中には兄さんと火影様のみがいるはずだ。態々相談役とタンゾウがいない時を狙ったのだ。
これを失敗するわけにはいかない。

「しかし、本当にそれだけしか方法がないののかのう？
儂としてはそんな方法を取りたくはないのじゃが……。儂にとって

里の皆は儂の息子の様な者。
民族に関係なく平和にしたいのじゃが……」

「失礼ですが、火影様。うちはをこのままにしておくと、尋常ならざる被害が生まれるでしょう。」

そのためには、私がうちはの因縁にケリを付けねばならないのです」

「そうか……作戦はいつ行うのじゃ？」

「次の満月の日……。どうか……サスケをお願いします。
あいつだけは……。どうか……護ってあげてください……」

「分かった……。お主の頼み。この猿飛ヒルゼンが死んでも受け入れよう！」

視覚障害を用いて兄さんの後ろに立っています。
やっぱり俺は決めた。俺は兄さんのように平和を守りたい。

ハーレムと平和！その為に俺は生きる！
原作もある程度は放置、俺は……自分のしたいように生きる！

「……火影様、イタチ兄さん。少し作戦を変えて欲しいんだけど……」

「「!!!!!!」」

二人が一体いつから……、と言いたげにこちらを見てくるがちよつと無視。

兄さんの驚いた顔は初めて見たかも……。

「何時から……いたんだ？」

「最初から、別にこれを父さん達に言うつもりはないよ。

けどね、うちは一族にはクーデターに関わりを持っていない一般人や、まだ子供だったり赤ん坊だったりでクーデターを知らない人もいるはずだよ？俺としてはそこを殺すのはやり過ぎだと思うんだ……」

「しかし、一般人でも元忍の者はいる。そいつが戦争を引き起こさないと限らないわけではない。

サスケ……、お前には本当にすまないと思っている……。こんな兄で……済まなかった……」

兄さんの目に薄らと涙が浮かぶ。
あの能面を張り付けたような兄さんが泣くなんて……。

「いや、サスケの言う通りじゃ。一般人は少し厳しいかもしれないが、子供や赤ん坊を殺すのはやはりやりすぎじゃ。残るのはサスケとコウジの二人のみじゃが……コウジには罪は無い。彼にも生き残ってもらうべきだと俺も思う」

流石火影様！歴代火影の中でも穏健派と言われたのは伊達じゃありませんね！
こちらを見て朗らかに、そして悲しげに笑う火影様に俺は全力で頭を下げた。

やはり、火影様としてはうちとは話し合いで解決したいと思っているのだろう。
けど、それはもう出来ないほどにうちとは木の葉の確執は広がってしまったっている。

「んじゃ、兄さん。行こっか。後10日も無いけど、最後ぐらいは兄妹らしく遊ばしてくれよ？」

「そうだな……、最後ぐらい……な」

目を瞑り上を向いている兄さんを俺はチャンス！と言わんばかりに懐に隠してあったチャクラ刀で首を切る。兄さんが切られた事も気付かないほどの勢いで。

「な、何をしておるのじゃ！サスケ！」

「ああ、もう大丈夫ですよ？ほら？」

「な、イタチ？どういうことじゃ……今は幻術？」

そして”大嘘憑き”で兄さんを生き返らせる。
いきなりの自体に兄さんは吃驚しているようだ。

「今のは俺が作った新術……、いや、禁術ですかね？
効果は自分が殺した相手、及び自分の蘇生です。怪我も治せますけどね」

「な……なんという術じゃ……。しかし……何故イタチを殺さねばならなかったのじゃ？」

「それは……こうするためですよ」

俺は万華鏡の開眼条件を満たした。
瞳を万華鏡へと移行させ、目を抉り取る。
兄さんと火影様は驚いて止める事さえ忘れている。

「……ツグ、ハアハア……これを……兄さんの目に移植してくれ。
その後、兄さんの目を俺に移植する。
これで万華鏡は光を失わずに済む……」

「サスケ……万華鏡の事まで知っていたのか……。分かった。お前の目、大事にさせてもらう。
俺とお前は目で繋がっている。フッ、うちのはの忍らしい最期じゃないか」

俺と兄さんは、火影様の執務室を後にする。
実はマダラの兄弟での相互交換は無理だったみたいだけど、俺達のは何故かいけた。
まだ万華鏡を開眼したてで視力が失われていなかったからか？

その後、俺は虐殺までの10日間を、精一杯両親や兄さんに甘えて過ごした。

「うちは虐殺の時」

今日の月は満月。辺りには血が飛び交っている。
恐らく、兄さんが粗方の忍を殺し終えたのだろう。
後はマダラに見つからないように、自分の部屋へと戻るだけ。

「お前が……うちはサスケが。お前の実力……見せてもらおうか……」

遭遇しちゃいました……マダラさんと……勝つ方法思いつかばねえよ……。

殺す方法ならばどうとでもあるんだが、どうしよ……？

「来ないのならこっちから行かせてもらっ」

「チツ、ヤケクソだよ畜生、火遁・火龍炎弾！」

素早く写輪眼を開眼させ、火遁の術を発動し、チャクラで練られた炎をマダラに向かって放つ。

この術は、使用した後も自由に操作可能なため、俺が最も使いやすいと思っている術だ。

その炎が、マダラに向かって飛んでいくが、案の定炎はマダラを通り過ぎる。

「ただの炎では俺に勝つ事は出来ん。今度は体術勝負といこうか」

マダラが俺に向かってキックやパンチを織り交ぜて攻撃してくる。これは好都合！と思い、オートパイロットを使い、全ての攻撃を避ける。

そして、僅かな隙を見せ、マダラが俺の腹へとパンチを当てた瞬間に、ベクトル操作を使いマダラの腹を本気で蹴り飛ばす。やはり、原作通り相手に攻撃を当てる時だけは実体化をしなければならないようだ。

「ハッ、これで少しは効いただろ……流石にこれでしばらくは起き上がれないだろ……4メートルにぶつかったぐらいの衝撃を与えたからな……これで起き上がられちゃあ……ってマジかよ……」

ユラユラとした怪しげな動きでマダラが立ち上がる。

幾らマダラでもベクトルを操作した渾身の一撃を喰らってはタダでは済まない様だ。

「その年にしてその体術、忍術、洞察力。全てにおいて卓越しているな……」。

流石はあいつの弟と言ったところか？まあいい……、今頃は貴様の両親も殺されているだろう。

またお前とは会う時が来るかもしれんな……」

兄さんは俺の事をマダラに話さなかったみたいだな。
まあここは驚いたふりをしておくか……。

「父さんと母さんが！？兄さんは大丈夫なのか！？それにお前は誰なんだ！」

「俺の名前はマダラ……お前の兄は……クックック、自分の目で確かめるといいさ」

マダラが瞬身の術で立ち去った後、俺は自分の家に向かった。誰が見ているかもわからないので、慌てた振りを装いながら。

そして、自分の家に着いた時、父さんと母さんは既に物言わぬ屍になっており、
兄さんは自分に背を向けて静かに佇んでいた。

「兄さん……しばらくはお別れだね……」

「……そうだな……サスケ……また会おう……」

それだけを言い残し兄さんは顔も見せずにその場を立ち去った。
俺も、顔が酷く汚れていたので兄さんと顔を見合わせなくて良かったかもしれない。

第三話

葬式の当日

今日はうちの葬式の日。

気候はどんよりとした曇り空で、俺の心を彩っているようだった。

「どうしてだよ……っ！どうして……母さんと父さんが殺されなきゃならなかったんだよ！」

俺の目の前には一人の泣いている少年がいた。

名前は”うちはコウジ”俺以外の唯一の生き残りだ。

「サスケ……俺は絶対に復讐する……母さんや父さんを殺したイタチに……」。

お前もだよな？許せないよな？唯の自分の器を図るためだけにみんな殺されたなんて……」

「悪いな……、俺は復讐なんて無駄な事はしない。
したいんなら一人でやってろ。俺は自分がやりたいように生きる」

「復讐が……無駄な事……？ふざけるなよ！罪を犯した奴を殺すのは正当な裁きだろ！」

いつの間にか、辺りの人々がこちらを注視している。
コウジがあまりの大声で怒鳴りたてているせいだろう。

「俺からしたら何も知らないお前は唯踊らされている道化に過ぎん
……」

「そうかよ！ならお前と話す事なんざねえよ！」

俺は、最後の生き残りのうちはとも決別した。
そして、俺はこちらに顔を向けている火影様の元へと向かった。

「火影様、私はまだ未熟な者です。故に、アカデミーを卒業するまでの間だけで構いませんので、どうか私を保護してくださいませんかでしょうか？」

「元よりそのつもりじゃ。木の葉の忍びは皆、儂の息子。コウジも

「こちらへ来なさい」

「嫌だ！俺はそんな軟弱者などと一緒にいない！俺は絶対に復讐する！」

それだけを言い残し、コウジはその場を去っていく。
そして、悲しそうな表情をした火影様と俺も、周囲の参列客がいなくなった後、その場を去った。

サスケ10歳の時

「なあなあ、ヒルゼン。俺さあ、少し任務やって自分の實力試してみたいんだけど良い？」

「はあ……お前のその口調はどうにかならんのか？この家に来てから数日もしたらそんな口調になりおって……、お前はどれほど猫を被っているんじゃ……」

「まあいいじゃん。適当なSランク任務ちよーだい。俺の實力ならヒルゼンも知ってるし、別にいいだろ？
木の葉丸も最近は真面目に忍術を練習してるみたいだし、俺がいな

くても昔みたいに泣かないだろ？」

なんやかんやで二年たったサスケです。

え？キンクリしすぎ？そういうメタな発言は無しでお願いしたいんですが……。

最近メキメキと忍術を学んでいます。流石はプロフェッサーと呼ばれるだけあり、一人で覚え切れるのか？と言いたくなるような術の量を覚えており、本当に危険な術以外は全て教わった。

”完成”まじパネエっす。一見でパーフェクトとか、身稽古かよ。って感じだし。

よく考えたら超能力が異常＋過負荷のどっちか一方でも十分に行けたかもしれないな。

「確かに……お前は異常なまでに術を会得し、僕の弟子としても最強……いや、今の僕が戦ってもお前には負けるじやろ。そこで……じゃ、お前さんにSランクの任務を課そうと思っている。ただし！飛雷神の術式を刻んだクナイをここに置いていき、危なくなったら時はここに帰ってくるのじゃ。よいな？」

「……俺って死んでも生き返るんだけどね。それに”今の僕”ってのは昔なら勝てたって事かな？微妙なところで張りあうなんて火影様

も人だと実感したなー」

「任務を渡さんぞ……？」

「すみませんでした！」

これが日本の伝統技能、ジャンピングDOGEZA。
滑り込むように相手の下にもぐりこみ、頭を地面に完全にくっ付ける！

これを見ればどんなに硬い奴でも、ドン引いて思わず許してくれるという戦法だ！

「う……うむ。

ではお主に任務を言い渡す。任務は戦闘への介入じゃ。

同盟国の砂隠れの里で小さな小競り合いが起きているらしい。

現在砂は諸事情で忙しいようで、こちらへ依頼が来た。

少数らしいが、血継限界も確認されておる。こころしてかかれ」

「了解しました、火影様。では行って参ります」

砂隠れか……前にマーキングはしてあるな……、直ぐに着くか。

それにしても血継限界か……試してみたい事が有るんだよな。
あれが成功すれば、俺は忍としても最強の忍になれる！

砂隠れの里付近の戦場

「どうやら……この戦闘は血継限界の数人が起こしたクーデターみたいなもんみたいだな。
こういう場合は頭を潰せば戦闘は終わるって相場が決まってるんだよな……」

初めての任務でテンション上がりまくります。
しかもマダラ戦以後の初めての命を懸けた戦いですし、俺が考案した新術の実験台にでもなってもらうかね……。まあ俺は実際問題死なないんで命なんて懸けてないけどね

「やあ……不吉を……届けに来たぜ」

決まったあ！一回は言ってみたかったこのセリフ！
前世でいったらただの厨二だけど、この世界なら唯の自信過剰です。
あれ？対して変わってない……？

「な、何なんだ、てめえは！何処の者だ！？」

「何処の……と聞かれますと木の葉の……忍見習いですかね？」

よく考えたら下忍でさえない俺に任務を託して大丈夫なのか？
まあ各一族の長は俺がヒルゼンの弟子で、実力が計り知れない事も知られてますし構わないか。

「まあ、深い事は考えずに一発戦おうぜ」

「ハッ、貴様を負かした後にじつくりと吐かしてやるよ！いくぞ！
フミ、トーノ！」

「おお！俺達の血継限界の強さを思い知らしてやろうぜ！」

「落ち付いてくださいよ、そんなんじゃあ勝てる者も勝てませんよ
？」

一体三、普通に考えれば圧倒的に不利な状況。
全員が各々の構えで相手を睨みつける。最初に動いたのは、フミと
呼ばれた青年。

「我らの最速最強の迅遁の前には貴様は着いてくる事さえ出来ねえ
！大人しく俺らにやられちまえよ！」

本人曰く、彼らは迅遁使らしい。

劇場版に出てたような気がする……まあどうでもいいんだけど、そ
こまで早くないよな……。

「遅い！まずは一人！血遁・血桜……」

それなりに早いスピード（写輪眼を使ってみれば普通に遅いスピー
ド）で迫り、クナイを俺に突き刺そうとした忍の腕をつかみ、相手
の血液をベクトル操作で逆流させる。

いくらなんでも相手に触れただけで相手を破裂させたらあまりにも
怪しまれるので、普段は”血遁”と自分で呼んでいる。実際、自分
オリジナルで血を使う水遁の術も開発したから完全に嘘……っつい

う訳でもない。

いつけね、試したいことあるのに使うの忘れてたよ……。

「何……その眼……うちはか！例え最強の一族であったとしても、フミを殺した貴様だけは絶対に殺す！いくぞ、トーノ！」

「ええ、フミ……あなたの仇……必ず取らせていただきます」

一人は目に見えて怒り、もう一人は穏やかそうに見えるが、その目を見る限りでは酷く怒っているように感じられる。まあだからと言ってなんだ？って話なんだが……。

周囲を二人が光速で移動している間に、俺は新たな印を結ぶ。

「生き残りは一人でいいさ……一人には……死んでもらう。血遁・血千本」

「はっ！何も発動してねえじゃねえか！単なるこけ……グッ……何……だと？」

「ミフキ！一体……何処から……」

名前判明、ミフキって言うらしいです。

まあどうでもいいんだけどね。ちなみに、血千本の発動場所はフミと呼ばれた男の死体から。

血はチャクラの伝導率が異常に高いので、チャクラを大量に練りこめばかなりの強度と柔軟性を持つかなり危険な武器になるのだ。

最後の一人のトーノとか言う忍の元へと瞬間移動し、腹を思いつきり蹴りつけ、その後にブローを決め、フミとミフキのしたいから血で作った千本を飛ばし殺す。

「殺したつてのにあんまり感慨が浮かばないな……。
まあ喜ぶとすれば、予想は的中していたから疾遁が使えるように成ったぐらいか？」

ちなみに、俺の予想とは本当に血継限界が血によって伝承されているのか？と言うものだ。

俺の予想では、血継限界の忍は本能レベルで術の使い方を覚えているのだと思う。

ならば、どのようにして使っているのか？と言う事だ。

俺の予想では、電気信号が関係しているのではないか？と思い、さ
っきの相手に”理不尽な重税”を使ったのだ。結果は成功。俺は相
手の血継限界を奪うことに成功したのだった。

俺はホクホク顔で里に帰還し、ヒルゼンから報酬をもらい、次の日
をエロ本を読んで一日が終わり。

ヒルゼンに物凄く呆れた顔をされた事をここに記しておく……。

第三話（後書き）

ここでハーレム要員が出ると思った人……残念です……。サスケはハーレム願望が有りますが、ハーレムになりません！

ちなみに、この小説を書いたのは気紛れ。

更新希望が多かったら書き続けるかもしれない。

中々に書いて楽しい小説だったのでww

第四話

アカデミー卒業の時

「よし、次！うちはサスケ！」

「あゝ、はいはい、分身の術」

「……っ、なんでそんなにやる気のない分身でそんなバカみたいな人数に分身できるのかを先生は知りたいんだけどなあ……？」

「ハハハ、まあ出来てるんですし良いじゃないですかイルカ先生。うちはサスケ、合格！」

「ありがとーございますー、きゃーうれしー（棒読み）」

なんやかんやでアカデミーを卒業した。

すつごくやる気がなかったから適当に分身したら数百人単位の分身が出てきた。

何か事前に予測されてたつぼくて俺だけ他のみんなとは違う部屋で試験受けたからな、なんて考えつつ、俺はシカマルの元へと行く。それにしてもミズキ先生の猫被りすごいなー、とか思いながら……。

「ちーっす、シカマルは試験に合格したか？」

「ん？まあな。流石にアレぐらいの術は出来て当然だろ。で、お前は今回はどんな規格外の事をしたんだ？」

「おいおい、それだと俺が毎回滅茶苦茶なことばかりやってるみたいじゃないか。
一体、何時、俺が、問題行動を、したんだよ？」

「障害物を避けて手裏剣を投げるときに障害物を貫いて的に当たたり。
変化の術を使う時に印を結ぶのが面倒とか言う理由で全員に瞳術で幻術掛けたり。
火影様が視察に来た時に殺す気のトラップを掛けたり……、むしろ問題行為以外を探すのが大変だよ」

「まあ幻術に気付いたシカマルも相当だと思っけどね、まあ今回は百人単位で分身しただけだよ」

「それを”だけ”で済ませるお前が怖えよ。それにしてもいいのか？
コウジの奴がお前の事をすっげえ睨んでんぞ？」

「ハハハッ！弱者に興味はないのだよ、ワトソン君。んじゃ、俺はもう帰るからね、また遊びましょ」

般若の如き形相で睨んでいるコウジを無視し、俺はアカデミーを後にする。

正確にはナルトの多重影分身をコピる準備をするのだが。

ちなみに、今の俺の服装は第二期のサスケの服装だ。

和服かつこいいよね！和服！一部の先生には胸が肌蹴てるとかの理由で怒られたけど、ヒルゼンに頼んでOKにしたらたぜH A H A H A！！

これで女子もイチコロ、とか思ってたんだけど、悲しきかな。

あまりにも授業の成績が良すぎて格好いい（自惚れではない）俺は高嶺の花的ポジションに追いやられてしまい、全然告白とかがないのである。むしろ、サスケ君は無理でもコウジ君なら……的な感じでコウジがモテモテに。……リア充は死んでくれ。

「なあ、ヒルゼン。ナルトってさ、里を壊滅にまで追い込んだ九尾の人柱力でもあるけどさ、里を救った英雄の四代目火影、波風ミナトの息子でもあるんだよな？ やっぱりさ、その事実を公表したほうがナルトの為にも良くないか？」

「……お前なら知っていても可笑しくはないか……。ナルトがミナトの息子なのは機密事項だったんじゃないかな。確かに、僕も今はそう思っていた。じゃがのう、僕はナルトを普通の子供として見ておいて欲しかったのじゃよ。それが結局、九尾の人柱力だと言う事だけがバレ。里の皆から迫害された。僕は間違った選択ばかりしておるのかもしれないのう……。あの時の大蛇丸を逃した時もしかり、うちはを根絶やしにした時もしかり……」

「確かにミスも多かったかもしれないねえな。
けどさ、里の皆から慕われてるのも事実だろ？ 今、木の葉の里が平和なのもあんたのおかげだし、人間だれしもミスはある。それに、大蛇丸の事は知らねえけどさ。うちはは自業自得なんだからヒルゼンの気にする事じゃねえよ。んじゃ、俺はもう寝るわ」

ナルトの多重影分身を覚え、これからの修行が効率よくなると思った時。

俺はヒルゼンとこんま話をした。原作隔離が怖いから基本的にアカデミーでは接触しなかったけど、少しぐらいは話し相手になってあげたらよかったかな。

結局俺はどの班になるんだろ……？と、悩みながら、俺はぐっすりと眠った。

班分けの時

「なあなあ、シカマル。お前は誰と一緒にの班になりたい？」

「んん、お前とチョウジかな？そのメンツなら楽できそうだし、お前がいたら全部の任務を一瞬で終わらせれる気がするしな」

「まあ強ち間違っても無いんだが、チョウジは何処にいるんだ？まさかの遅刻か？って……向こうで菓子をバリバリ喰ってるだけだよ。」

「んじゃ、俺は少し移動しとくから、一緒にの班になったらよろしくな」

誰になるかな、誰になるかな？タタタタタタタタタタン♪

まあヒルゼンは俺の実力を知っているし、普通に考えたら力カシ班か？

てなるとコウジは？俺としたらナルト・サスケ・サクラ・俺っていう展開が望ましいんだが。

あ、コウジがナルトとキスした……。
ってことはサクラはコウジが好きなのか……。なんか取られた気分になるな。

「班は力のバランスが均等になる様にこっちで決めた」

その言葉に反論が飛び交うが普通だろ？
雑魚い奴同士が組んだらそれこそ目も当てられないぞ。

忍つてのは命を奪いあう者だっていう自覚が足りないのかねえ？
この子供たちは九尾襲撃も知らない奴らだしな。
強いて言うなら大虐殺を受けた俺とコウジぐらいじゃないのか？

「じゃ、次は七班。うずまきナルト・春野サクラ・うちはコウジ。
それと、特例としてうちはサスケだ」

「イルカ先生！！よりにゆよって優秀なこの俺が、何でこいつと同じ班なんだってばよ！！」

「お前はあまりにも成績が悪すぎるから、成績一位と二位のサスケとコウジを付けてようやく班の力を均等に出来るんだ。分かったら

静かにしろ！」

イルカ先生……それ逆効果。

まあ案の定ナルトは大騒ぎ。多分この後コウジに変化でもしてサクラにキスするんだろうと予想。

まあサクラはあまり好きじゃないのでスルーして家に帰る。カカシに仕掛ける罫でも考えてから寝よ。

ナルトの家にて

「ここがナルトの家ねえ……」

「そうだ」

ナルトの家に絶賛不法侵入中のカカシと火影。

上忍の中でも最強の部類に入るカカシと、火影の座に座っているヒルゼンが不法侵入とは、中々に見られる物でもないのである。

「まぬけな奴だがお前に見張らせるのが一番だ。お前は鼻がきく。」

それから……お前が受け持つ班にはうちが二人いる」

「……二人と言いますと……あのサスケもいる訳ですか」

「ああ、どうやってかは知らんが他の忍の血継限界をもコピーし、Sランク任務においても無傷で生還したりしておる。まあ、安心な事にサスケには野心も無ければ復讐心も無い。そういう点においては安心じゃよ。まあ強いて汚点を言うなら性に異常なまでに執着を持っている気がするがのう……。まあ健闘を祈っておく」

「まあ私も彼は気になりますしね。それにしても問題児ばかりですね。

なんで私がこんな班を……。はあ、まあ頑張りますよ」

何気に火影からの信頼を得ているサスケだった。
サスケの異常な性への執着も見抜かれているようだったが……。

第七班顔合わせの時

ウツハツハ！今日、俺は、究極の、罨を、持ってきた！
昨日寝る間を惜しんで口寄せの術式を書き込んだ巻物を大量に作っ

ただ。

毒は入れてはいないが、テンテンが使っていた忍具を遥かに超える出来だと思う！

「ナルト、じつとときなさいよ！」

「何でオレ達七班の先生だけこんなに来んのが遅せーんだったばよオ！！

そーだ、ニシシシ。遅刻してくる奴がわりーんだよ」

「ったく、もー！私！知らないからね！」

「フン、上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ」

「そーだぞ、ナルト。罠つてのはこれぐらいやるんだよ。ちよつと俺のやる事を見とけよ？」

俺が持ってきた巻物のうち、一つを床に敷き、地面と同じ柄の布をその上に被す。そして、避けると思われ位置に偽物の巻物をおく。だが、相手はコピー忍者のはたけカカシと恐れられるほどの忍。絶対に避ける。ならば、その巻物の四方に床に偽装した巻物を仕掛ける。

「すまん……ッ!!」

カカシが来た！先ずは手始めに四方からのクナイの飛来。普通の巻物は開いた場所に出てくるだけだが、飛雷神の術を応用し、相手の四方に発生させて相手に向かって飛んでいく。カカシは驚きながらも上に飛ぶが、そこには千本が大量に飛んでくる、そこにはあえて少しの隙間を作つてある。そして案の定カカシはそこを抜けて来、あらかじめセツトしておいたダミーの巻物の上に落ちそうになる。しかし、それを全身をひねつて何とか巻物の横に着地する。しかし、そうは問屋がおろさない。最後にしかけておいた巻物が開き、全身に雷が通る。全身に雷が流れて身体が痺れている間に、とてつもなく強烈なおいが流れ、カカシの体臭を酷いものにする。

フジムナオオカメムシと言う、この世界でも最も臭いと言われている虫の体液を濃縮した物をスプレー状にした物をさつきは吹きかけたのだ。この臭いは直ぐに取れるのだが、その臭いは異常なまでに臭く、もと暗部のカカシでさえ悶絶するほどであった。

「……（やりすぎ……）」

「……ッブ！ハハハッハッハー！臭えー！やっぱ……！……フウ、大丈夫ですか？カカシ先生。」

実は、俺は必死に止めたんですけどナルトの奴が……、すいません……」

「んー、はつきり言つて、お前の第一印象はあ……死ね」

大人げなくサスケに暴言をはいたカカシ。そのあと、若干カカシに怒られたような気もするが、あまりにも臭い為に屋外へと移動し、お互いに自己紹介をする事になった。

「んじゃ、自己紹介でもしてもらおうか。好きな物でも嫌いな物でも、将来の夢とか趣味とか……」。

ま！そんな感じで自由にやってくれ。まずは俺から行くか。

オレは「はたけカカシ」って名だ。好き嫌いをお前達に教えるつもりはないが……強いて言うならうちはサスケが嫌いになったな。将来の夢って言われてもなあ……、まあ趣味はいろいろだ」

「ねえ……結局わかったの……名前だけじゃない……？」

「まずはオレから！名前はうずまきナルト！好きな物はカップラーメン！もつと好きなのはイルカ先生におごってもらった一楽のラーメン！嫌いなものはお湯を入れてからの三分間。将来の夢は……火影を超す……ンでもって、里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ……」

「名はうちはコウジ、嫌いなものなら沢山あるが、好きな物は別がない。それから……夢なんて言葉で終わらす気はないが野望はある！一族の復興と……ある男を、必ず……殺すことだ」

「私は春野サクラ。好きな者はあ……ってゆーかあ……好きな人は……。えーとお……将来の夢も言っちゃおうかなあ……キヤーー！……嫌いなものは、ナルトです」

「最後は俺か？うちはサスケ。好きなのは女と兄さん、嫌いなものは、仲間を見捨てる屑だ。将来の夢は上忍になつて美人の嫁をもらいたいな。復讐なんて厨二臭い事はするつもりはない。それから一つ先生以外に言うとするば……」忍をナメるな。敵は迷わず殺せ。一時の迷いが仲間を殺す”だな」

カカシは好感、コウジは敵意、サクラとナルトは驚き……かな？Sランク任務、俺はずっと一人でやっていたが、もし、足手まといがいればどうなるかは分からない。

それに、第七班には再不斬というバケモンと闘う任務が有るんだ。覚悟を今から持たしておくにこしたことはない。

「まあ自己紹介はここまでだが、明日にはある任務についてもらう。サバイバル演習だ」

他の三人は何もわかってないみたいだが、難易度だけでいうならこの任務はAとBぐらいはある気がする。

「相手はオレだが、ただの演習じゃない。卒業生28名中、下忍と認められるのは最大でも十名。残りは全員アカデミーに戻される、この演習は脱落率60パーセント以上の超難関試験だ、とにかく、明日は演習場でお前達の合否を判断する。忍具一色式も持ってこい。それと朝食は抜いとけ……吐くぞ、解散！」

さて……どうするべきか？

わざと負けた振りをする？強引に四人で協力する？一気に圧倒する？まあ……出たとこ勝負でどうにでもなるか？

第四話（後書き）

更新頑張ってます。

ネギまの息抜き程度に書いていますんで、極度の期待はしないでくれると有り難いです。

第五話（前書き）

サスケは基本的に実力を隠しています。

まあ隠してても最強のレベルなんですけどねwwww

光化静翔だけでも普通の人間は勝てんよww

大嘘憑きなんてどう戦えばいいんだよwwってレベルですしねww

第五話

サバイバル演習の時

「鈴は二つ。本来なら一人は確実に不合格なんだが、この班は四人いるからな。
残念なことに二人は確実にアカデミーに戻ってもらう、んじゃ、一時になつたら終了だ」

原作通り、ナルトは単独プレイ、コウジは全員を足手纏い扱い、サクラはナルト放置でコウジを探しまくると言う荒業。それにしても、一時間原作よりも長いのは俺のせいかな？

「んじゃ、お前も出てきなよ、サスケ」

「あ、やっぱりバレてました？流石はコピー忍者のカカシです、ねっ！」

言葉と同時にカカシに足払いを掛ける。
それをカカシは苦も無く躲し、逆にパンチを放ってくる。

12歳で上忍になった相手とともに体術をやるのは愚策の為、”
光化静翔”を使いカカシを一瞬にして蹴り飛ばす。いくら優れた人間でも、光の速さで迫りくる蹴りを避ける事は不可能。

あり得ない速度で放たれた蹴りに驚愕しつつも、カカシはサスケが並の相手ではないと悟り写輪眼を発動させ、サスケに話しかける。

「流石はうちの鬼才と言ったところか、正直なところ舐めていたよ。」

ここからは忍らしく忍術合戦とでもいこうじゃないか」

「写輪眼……、俺も使わせてもらいますね。行くぞ！」

写輪眼同士の戦い、今を生きる写輪眼の使い手は六人。

滅多にお目にかかる事の出来ない試合。それを見て、コウジは驚愕していた。

「あれは……写輪眼！？何故カカシが使える……！？それにサスケの奴はもう開眼してたのか……」

「なあなあ、サクラちゃん！シャリンガンってなんなのさ？」

「黙れ、ウスラトンカチ。」

写輪眼つてのはうちは一族の中でも優れた者にのみ開眼する眼だ」

「え？けどさ、けどさ！サスケはともかくカカシ先生はうちはじゃないってばよ？」

ナルトとコウジは話しこんでいる間にも試合は進んでいく。

優れた忍同士での勝負の場合、普通は印を結ぶスピードが超高速となるために見る事が出来ない。

しかし、彼らには写輪眼と言う優れた洞察眼を持った瞳が有る為、術を同じ術で相殺する事が出来る。

「水遁・大瀑布の術！」

「くっ、水遁・大瀑布の術！」

しかし、幾ら同じ術を使えるとしても、術には相性が有る。

サスケの適正は火・水・雷だが、カカシの適性は雷・土。そのため、水遁系の術の打ち合いではサスケに幾らかの分がある為、サスケの水流がカカシの水を逆に飲み込みカカシを襲う。

「まだまだ！雷遁・地走り！」

そして、忘れてもらっては困るのは、サスケに備わったチート能力の数々である。
今回使うのは”電撃使い”。これによって一気に水を電気分解させる。

これは相手がカカシだからなせる術で、もしカカシではなく並の上忍ならば水とともに感電死、天へと召されてしまったことだろう。

「甘いな、サスケ。確かにお前は並の上忍よりも強い。
だが……詰めが甘いな。ま、年の割には充分見所が有るよ」

いつの間にか後ろに回り込んでいたカカシによってクナイを首に添えられる。
しかし、サスケはクナイを突き付けられたというのに不敵に笑いカカシに告げた。

「いいや、俺は終わっていないさ」

「ッ！影分身か！」

カカシがクナイを向けていたのはサスケの影分身。
水遁・大瀑布の術を発動させた時に密かに入れ替わっていたのである。

「終わりですよ、火遁・朧火……」

サスケが作ったオリジナル忍術の一つ、朧火。
火力としては最低レベル。下忍でももう少しいけるのでは？というレベル。

この術の一番の長所は不可視。
本来、火遁の術、否、全ての術は一部を除き体の何処から放出される。

しかし、この術は自分の任意の場所に炎を発生させる事が出来る。
つまり、大量の水が電気によって分解されたことにより発生した水素と酸素が一気に化合するのである。

その勢いは計り知れなく、カカシは為す術も無く地面に倒れていた。そのあと、鈴を取ろうとカカシの元へと近付くが、当然の如くあの熱量にただの金属が耐えきれはるはずがなく、その場に立ちつくすサスケの姿だけがあったそうだ……。

三時間後

「あ、起きましたか？先生？何かすいません、やりすぎちゃったみたいで」

「ん……？サスケか。それにしても驚いたよ。」

火影様から強いとは聞いていたけどあそこまで強いとはね。他の三人はどうした？」

「ああ、あいつらなら明日に同じ時間に集合とだけ伝えて帰らしましたよ。」

で、どうするんですか？あの演習の本来の目的はチームワークの確認。

全員が不達成で俺に至っては正攻法で先生に勝っちゃったんですけど？」

「やっぱり気付いてたのか。まあお前に至っては合格だよ。」

あの任務の本質にも気付いていたし、実力も申し分なし。というより、有り過ぎるぐらいだ。

まだあるんだろ？奥の手が……噂は聞いているよ、”六道仙人の再来”という異名が付いた理由……ありとあらゆる血継限界を使っているというね」

真剣な眼差しでサスケを睨む。

絶対にあり得ない事、それを成し得たと言われているサスケは十分に危険である。

いくら火影様が安全と言っても、大蛇丸の例もあり完全に信用するのは少し厳しい。

なぜならば、もしサスケが他里に抜けたとすれば、その里はあらゆる血継限界のサンプルを手に入れた事と同様なのだから。

「まあ使えるな。やり方さえ分かれば……誰にでもできるかもしれないが。」

まあやれば十中八九死ぬと思うけど……。まあ気にする事はないさ。

明日、俺は休むからな。ナルトは……大丈夫だと思うがコウジには気を付けておいてくれ。

あいつは復讐を柱にして戦っている。もしそれが崩れてしまえば……わかるだろ？」

「お前に言われなくても分かっているさ。俺の仲間は絶対に欠けさせやしない。」

お前の方が強くても、任務では俺に従ってくれよ？」

翌日

「さてと……遊郭にでも遊びに行くか。」

この前はヒルゼンに見つかったからな。こちらとて健全な十二児時なんだよ。

ずっと女と触れずにいたら干からびて死んじまうぜ」

「ほお、それは良い事を聞いたことじゃ。」

どれ？一度干からびてみてはどうじゃ……？」

「ヒ……ヒルゼン……」

第五話（後書き）

今回は短め。

ってか”ネギま”の新作を書きたくなった。

気が向いたら書くかもしれない。

ちなみに、主人公は微最強系の予定。

第六話

「ん……んん……、はあ、朝……かな？」

里の中心部に建てられた自分専用の家で目が覚める。

此処は” お金もあるんだし一人暮らしした方が良くね？” などというサスケの浅はかな考えでついこの前に建てられた家である。ちなみに、部屋は基本的にモノクロチックで、大体の家具はサスケの自作だったりする。

「今日は……、あいつらの追試験だったか？ コウジは原作サスケより性格悪い気がするしなあ……。」

あいつらきちんとやれてんのか？ まあ俺のせいってのもあるかもしれないけど……。」

昨日あれだけの戦いを見せつけられたのだ。コウジとしては負けてたまるか！ 的な展開でナルトに弁当を上げずに黙々と体力を回復しようとしてもおかしくない。

まあ分からないものはいくら考えても仕方がないので、部屋を出てあたりを散策する。

今は昼時だし誰が見つかればいいんだがな……。

「あゝ？紅さんとアスマじゃないですか、こんな所でどうしたんです？って聞くまでも無いですね、御邪魔虫は帰らしてもらうんでしつかりホテルまでエスコートしてあげてくださいね」

「おい、待てコラ。別にそんなんじゃないやねえよ。それよりお前は どうしてここにいるんだ？」

第七班はもう一回テストをするって力カシの奴が言ってたぞ？」

街を練り歩いていたらアスマと紅さんにエンカウントしました。

謝罪

えっと、、皆さまに謝らなければならない事があります。

先日の投稿……アレって不完全な下書きを投稿しちゃったんですね（笑）

まだ書く内容があるのにww

けど、何故か気付くと日刊ランキング33位。

これって読者様に失礼じゃね？って思いましたので此处で謝罪させていただきます。

本当にすいませんでしたm（ ）m

只今絶賛スランプ中（笑）なので続きが何時になるかは分かりません。

もしかしたら削除して新作を書くかもしれません（新作は一話のみ執筆終了）

そんなダメダメな作者ですが、どうか見捨てずに頂きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0371r/>

サスケにひょーい!!

2011年5月30日21時26分発行